

# 文学部における国際化に向けての取り組み

## ——国際高大連携を中心に——

大学文学部教授 斉藤延喜

### はじめに——文学部と国際主義

平成21年度「国際化拠点整備事業（グローバル30）」として同志社大学の申請が採択された後、国際連携推進のための態勢が全学的に整備され、様々な新たな取り組みが始まっています。このような状況に対する、文学部からの「反応」のひとつが、国際高大連携への取り組みです。他にも、ウーロンゴン大学との学部間協定に加えて、新たに、台湾の国立政治大学および佛光大学との交流協定締結など、文学部においても、国際交流に向けて積極的に取り組み始めています。

文学部における国際主義には長い歴史と実績があります。韓国から留学生として同志社大学にやってきた伊東柱（ユン・ドンジュ）や鄭芝溶（チョン・ジョン）が学んだのは文学部においてでした。彼らはその後の本学と韓国との国際交流の重要な礎となりました。2009年度に文学部で学んでいる外国人留学生は学部18人、大学院18人、計36人に及んでいます。全学の海外派遣留学生の中でも、全派遣学生69人中、文学部学生は28

人にのぼっています。

2013年の文系学部の今出川統合に向けて、改めて、各学部の理念と目的を再確認し、より明確にすべき時、大学全体の理念の重要な柱である「国際主義」を担う一角として、文学部は自らの伝統と実績に基づいて、より意識的に、そして積極的に、国際化に取り組むべく、動き出した、といえるでしょう。

### 韓国の高校との国際高大連携

2010年3月に文学部は韓国の大一外国語高等学校、京畿外国語高等学校、および果川外国語高等学校の3校と国際高大連携協定を結びました。いずれも、2009年度の修学能力試験で平均点が韓国の全高等学校のなかで上位20位以内に入る、優秀な高等学校です。「外国語」という名称にあるように、日本語を含めた外国語教育に特化した高等学校で、「グローバルリーダー」となる人材の養成を目的としています。

高大連携の相手校との協議を開始したのは2009年の秋でした。10月に韓国ソウルを訪問し、11月には国際化推進室との

共催という形で、主要高校の関係者を招いて、説明・懇談会を開きました。その際に、積極的な関心を示していただいた学校とさらに協議をするため、文学部長と文学部教務（国際）主任が訪韓し、細部を詰めた上で、3月の協定締結に至りました。

協定が定める連携分野は二つあります。一つは「国際高大連携プログラム」で、各高校の在学生を対象に特色ある講義や研修等を文学部が実施するというものです。もう一つは、「国際

年1月に実施の予定です。日本語クラスの他に、京都市内での伝統文化体験や学内高校生・留学生との交流会といった内容で、詳細な実施案を現在作成中です。「特別推薦入学制度」については、2011年度の入学試験要項として既に決定されています。学校長の推薦に基づいて、各校より2人以内、計6人以内を、韓国ソウル市内にて面接試験のうえ、受け入れの判定を行うことになっています。

### おわりに——文学部と国際主義の今後

他にも、教育・研究の両面での国際化に向けて具体的な取り組みを文学部で始めています。本年11月には「東アジアの近代と文化形成」（仮題）というテーマで文学部主催の第3回目の国際シンポジウムを開催する予定です。また、新規学部間協定あるいは海外の大学とのダブルディグリー制度導入の可能性についても、検討を進めています。

日本への、とりわけ京都、同志社大学への留学に関心のある人たちにとっては、文学部は魅力的な「コンテンツ学部」です。この「コンテンツ」は、単に日本文化の紹介ということにとどまりません。「グローバル社会」における人間のあり方、世界的な視座から言語、文化、歴史における人間のあり方を研究すること、つまり、「国際主義的な人文学」の構築と実践、が真の「コンテンツ」になるでしょう。今、文学部が始まっていることは、この遠大な目的に向けての、最初の一步に他ならないのかもしれない。



ソウルでの合同説明・懇親会（2009.11.26）

高大連携特別推薦入学試験「制度」の導入で、各高校の学校長の推薦に基づいて、推薦入試を行うというものです。まずは、本学のキャンパスを訪問して、同志社大学および文学部についてよく知って関心をもってもらい、その後に、強い志望・意欲をもった留学生を文学部に迎えたい、というのが、協定の趣旨です。

「国際高大連携プログラム」については、3高校より参加予定者30人で、8日間の「短期研修プログラム」として2011

# 政策学部と総合政策科学研究科の一体化

大学政策学部長・総合政策科学研究科長 真山達志

## はじめに

2010年4月から政策学部と大学院総合政策科学研究科（以下、総政と記す。）が一体的な組織として生まれ変わった。政策学部は2004年に同志社大学では55年ぶりとなる新学部として誕生した。総政はそれに先立つこと9年前の1995年に、同志社大学では初となる完全な独立研究科として設置された。教育研究の趣旨や狙いにおいて共通している両者が一体化することは自然な流れであった。むしろ、なぜ最初から先にある総政に学部を設置する形で政策学部を開設しなかったのかという疑問が生まれるだろう。そこで、双方の設置に関わった身として、その経緯や背景について記しておくことにする。

## 独立研究科としての総政

総政が独立研究科として設立された背景には、政策を研究するためには学際的なアプローチが必要になり、既存のいずれか部レベルと大学院レベルではかなり性格が異なるためである。学部では社会科学一般の広い知識の習得とリベラルアーツ教育が求められるが、大学院では専門性と実務経験を含む実態的知識を必要とする。第二には、55年ぶりに新学部を作るのであるから、まずは白いキャンパスに思い通りの絵を描いてみようという思いがあったからである。既存の組織を母体にする、カリキュラムに合わせて人を配置するのではなく、人に合わせてカリキュラムを作るという事態にもなりかねない。そこで、独立した学部として企画が進められた。実際、政策学部のカリキュラムは、導入教育の充実、社会科学系の複数分野の基礎教育といった、総政とは異なるコンセプトで組み立てられた。

## おわりに

とはいえ、政策学部が問題発見能力、問題解決能力の向上を目指していることや、それらを政策というキーワードで捉えていることから、基本部分において総政と共通することは明らかである。したがって、両者の持つ知的、人的資源を一体的に活用することが有益であることは間違いない。また、総政が独立研究科であるがゆえに抱えていた課題を解決する意味でも、学部と一体化することは意義がある。そこで、政策学部の設置から6年を経過して、一定の経験と実績を蓄積したことを踏まえて、政策学部と総政を一体化することに踏み切った。

こうして、確固たる独自の理念と実績を持ちつつも政策研究という点で共通性を有した学部と研究科が一体化することにな

一学部を基礎として設置することが難しいことと、社会人を積極的に受け入れることを使命にしていたことがあった。開設初年度から社会人を中心に定員を大きく超える大学院生を受け入れることになり、総政の設置の趣旨や意図は正解であったと言える。しかし、規模が小さいため大学院生の多様な研究テーマに対応する指導体制を構築することに限界があるなど、独立研究科ならではの悩みもあった。そのようなことから、総政の基盤となる学部を設置することは中長期的な課題であった。

## 政策学部設置の背景

一方、政策学部は、大手私学の中で長らく学部新設をしていなかった同志社大学が満を持して新学部展開を始める急先鋒を担った学部である。当初から、政策系の学部を作ることで検討が始まり、総政を母体にすることも想定されていた。しかし、あえて独立した学部として設置することになった。

なぜなら、第一に、政策に関する教育・研究については、学った。それにより、政策学部の大学院任用教員全員が総政の専任教員となり、専任スタッフだけで総政を運営する体制が完成した。一方で、総政の教員は政策学部へ所属替えになり、政策学部の教育体制も充実した。また、大学院進学を希望する政策学部生に明確な目標を持ってもらえるようにもなった。これを機に双方の力を発揮して、1+1が2ではなく3にも4にもなるような教育研究を展開していく所存である。

## 同志社大学政策学会講演会

テーマ 「我が国の知的財産戦略について」

講師 杉田定大氏（早稲田大学客員教授、

元内閣官房知的財産戦略推進事務局参事官）

「今なぜ知財戦略か？」「知的財産政策を巡る最近の動向」「オープン・イノベーションと知財戦略」などを講演。



講師は「知財立国」を掲げた小泉純一郎総理大臣（当時）の下で、参事官として日本の知的財産制度改革を牽引。講演終了後、質問者が並び、講師との質疑応答で関心と思考水準の高さを示した。（2010年7月16日大学今出川キャンパス 寧静館31番教室にて）



# 同志社大学マンドリンクラブ100周年 —伝わる音色、つながる心の軌跡—

大学マンドリンクラブ顧問  
大学生命医科学部教授 渡辺好章

## はじめに

同志社大学マンドリンクラブ (La Società Mandolinistica dell'Università Doshisha: 以下SMD) が創部されたのは1910年、グリーククラブのメンバーがクラブ内にマンドリンを持ち込んだことがそのルーツです。この時代は、1894年に日清戦争、1904年に日露戦争、それに続いて1914年には第1次世界大戦と、わが国が10年ごとに戦争を繰り返していた時代です。また、同志社史における1910年は、同志社英学校開設から35年目であり、同志社病院や同志社看護婦学校が経済上の理由から閉鎖された1907年の直後、さらには専門学校令による同志社大学開学の2年前ということになります。このような時代背景と、設立されたのが学生音楽演奏団体それもマンドリン音楽ということを考え併せるならば、クラブを創設しようとする当時の学生たちのマンドリンに対する並々ならぬ熱き思いをご理解いただけるものと思います。以来マンドリン音楽を共通の幹として、この情熱は後輩たちにも脈々と受け

継がれクラブの卒業生で構成されるSMD会（私も会員です）の会員は既に1100人を数えます。SMDは本年でクラブ創部100年という記念すべき節目を迎えました。100年という数字の持つ意味は重くSMDは135周年を迎える同志社とほぼ4分の3の歴史を共有していることになりました。

## SMD活動の経緯

創部当初はグリーククラブとの関係も強かったSMDも徐々に独自の路線を歩み始め、1922年には技術顧問に新進気鋭の菅原明朗先生をお迎えしマンドリン音楽の研究ならびにその奏法の技術向上を図り、同年の6月には18人のステージメンバーで第1回の私演会を挙げております。このような努力が実を結び、翌1923年にはSMDは第1回全国マンドリン合奏コンソルソにて優勝という栄誉に輝きました。さらにその次の年の第2回も他の合奏団体と同位優勝を成し遂げ、SMDの名は全国に知られるようになりました。その後、戦時中を除いてマンドリン音楽の普及を目指して私演会の開催は継承され、

1958年からは年2回の定期演奏会として定着・発展し、今年の春には156回を迎えるに至っております。この進展の原動力として特記すべきは、わが国のマンドリン音楽研究の第一人者である中野二郎先生を1963年に技術顧問としてお迎えしたことでしよう。中野先生が世界中から蒐集され編曲された多数のマンドリン曲を本邦初演として紹介し、SMDは日本のマンドリン界の牽引役として大きな役割を担ってきました。1969年には、ドイツマンドリン連盟創立50周年記念音楽祭に日本代表として招待され、その後の1カ月にわたる欧州演奏旅行においてわが国のマンドリン音楽のレベルの高さを紹介し各国において絶賛を得ております。中野先生は1984年に勇退され、先生が蒐集された多数の楽譜は「中野譜庫」として大学図書館に収められ、マンドリン音楽研究の有益な資料として今も利用されております。1994年にはSMDのOBである石村隆行先生（85年大学文学部卒）が技術顧問として就任され、中野路線の継承に加えて先生独自の視点からのマンドリン音楽の新たな追求も始まっています。

## 100年が繋ぐもの

本年3月の京都コンサートホールにおける記念コンサートではSMDが100年にわたって継承してきたマンドリンへの思いを満員の聴衆に堪能していただくことができました。また同時に編纂された「同志社大学マンドリンクラブ百年史」は、一学生演奏団体のささやかな史実の集積ではありますが、上述したSMDの歴史を考え併せるならば、わが国の近年の音楽史と

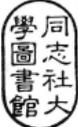
しても史料的价值は十分に高いと思われまふ。100年という歴史の持つ重みは言葉で言い表せるものではなく、歴代の部員各位の心の繋がりがそのものであると思います。この繋がりが源泉となるのでしょうか、クラブのOB会組織も積極的な活動を続けています。とりわけ年に6回ものOB会報の発刊の継続実績は他の団体のOB会組織には類を見ない特筆すべき事業であり会員の心を繋ぐ大きな求心力となっております。新島先生は同志社の完成には200年の年月を要すると書き残していらつしやいます。SMDも、脈々と受け繋がれる響き合う心の連携によって、さらに大きく発展することでしょう。100年後が楽しみです。

本報を記述するにあたり100年史編纂委員会委員長の赤井悟氏（78年大学工学部卒）からは資料の提供を受けました。これにお礼申し上げます。



1918年（大正7年）頃の部員

## 中野譜庫



大学図書館の中野譜庫蔵譜印

## 23回を迎えたオペラクラス「ファイガロの結婚」

女子大学芸学部教授 井上敏典

## 女子大学でのオペラ公演へのチャレンジ

1988年3月3日、頌啓館ホール（女子大学京田辺キャンパス）にて第1回目（正確にはその前年のEVE〈大学祭〉で今出川キャンパス旧頌啓館にてピアノ伴奏で上演）のオペラ公演「モーツァルト作曲の『ファイガロの結婚』」が上演されました。今から22年前のことです。まだ本格デビュー前の佐渡裕指揮による学生オーケストラという活気的な挑戦でした。これは声楽アンサンブルの授業の成果発表を拡大したいという当時の3年次生が、1年後のオペラ上演に向けて大学と交渉をし、実現したという情熱の賜でありました。しかしオペラには舞台装置、小道具、衣裳、そして男性キャストがいります。女性しかない女子大でどうするか。なにもない女子大学でのオペラ公演が相当無謀なことであったことは火を見るよりも明らかでありましたが、学生の心意気に男性教員が全面協力体制をとり、第1回目より演出を担当していただいている坂口茉莉先生（女子大学嘱託講師）の絶大なるご協力を得て、回を重ねる度に内容の

充実したオペラが上演できるようになったわけであります。授業名称も1996年のカリキュラム改正で「オペラアンサンブルクラス」と変更になりました。

## 地道な努力が財産を築く

何もないところからのスタートは今では沢山の財産を作りました。まずは「衣裳」。1993年に日本を代表する衣裳デザイナーである岸井克己氏の協力により、3年計画で全キャストの衣裳制作に取り掛かりました。同時に大道具も当時の在学生のお父様より寄贈をいただき、今日の本格的な装置の基盤ができました。そして声楽コースだけでなく、練習のためのピアノ、そしてオーケストラといった学生主体で進行できるノウハウを築き上げてきたことが何にも勝る財産となりました。

## 舞台を支える貴重なスタッフの経験

演奏を学ぶ者にとつて裏方の仕事の経験をすることはめつたにありません。しかし、表舞台でライトを浴びる人こそ舞台を



スタッフとキャスト関係者全員

支えるスタッフの有難さを知る必要があります。女子大学音楽学科では1・2年次生が大道具、小道具、衣裳、照明を担当し、プロの方の指導を受けながら黒ずくめの服で動きまわります。3年次生は合唱として舞台に立つ経験を積みまわります。そして4年次生でソリストとしてライトを浴びるのです。もちろん4年次生は舞台に立つ経験がスタッフへの思いやりと感謝の気持ちとして舞台を成功させようという義務感と覚悟を作ります。

## 関西では考えられない贅沢な男性キャスト

もう一つ自慢できるのが、助っ人の男性陣です。関西には二つのプロのオペラ団体がありますが、その2団体の合同体制をとつても実現できない男性キャストが女子大のオペラで共演しています。関西だけでなく全国規模で主役として活躍しているソリストが、このオペラクラス公演では主役から脇役に至るまでしっかりと舞台を支えてくれています。そんな中で舞台を一緒に経験できることは同志社女子大学において他では考えられないことでもあります。感謝の一言だと思えます。

## オペラの経験を社会に生かして

学生がオペラを制作していく過程にはさまざまな壁があります。全体の運営やそれに関わる人材確保やその為の交渉等、楽譜を読んでパフォーマンズをするだけでは成立しない苦労をするのは、卒業後に経験する社会の試練に対して、しっかりと対応できる能力を養うことに繋がると確信しております。

同志社女子大学の学生は、素晴らしい環境で経験したことをしっかりと社会に生かされる能力を持った人の集まりで、卒業後の活躍も大いに期待できるものであります。23回の公演を終えたオペラ公演も今年度は24回を迎えます。第1回目よりご指導をいただいております諸先生方には心より感謝を申し上げます。今後共にご指導をいただけますようお願いを申し上げます。皆様には同女オペラに今後共温かいご声援をいただきますようお願いを申し上げます。

# 女子大学に砂場?! —砂場からのこども学—

女子大学現代社会学部教授 笠 間 浩 幸

今春、女子大学中庭の一角に砂場が完成しました。これは、現代社会学部現代こども学科で、幼稚園や小学校の教員免許を取る学生たちの実習の場として活用されていますが、実はそれだけではありません。砂場に潜む魅力の一端を紹介します。

## たかが砂場、されど砂場

およそ100年前のアメリカ、ボストンの貧民街。貧しい移民の子どもの生活はたいそう荒れていました。彼らに対し、心ある大人たちは、アメリカ最初となる砂場をつくりました。すると、それまで当てもなくさまよっていた子どもたちは、砂場にやって来て一日中楽しく遊び、そしてにこやかな笑顔で家に帰っていったのです。

だれの目にも「遊び」がもつ力は明らかでした。すぐにボストン市内のあちこちに砂場がつけられ、さらにブランコやシーソーなども備わった遊び場が、全米中に広がりました。これこそ今日の児童公園につながるプレイグラウンド・ムーブメントの幕開けでした。

心理学の祖ともいえるスタンレー・ホールは、単に多量の砂を盛っただけの砂場が子どもにとってどれほど重要なものであるか、次のように述べています。「砂遊びには、勤勉な努力、見通しをもった運営、道徳、地理、数学等のあらゆる教育の要素が含まれている。…多様な興味と活動を統合させる砂遊びは教育として理想的である。教育においては、理想的なもののほど実際のであり、実際のなものは理想的である」(津守真『子どもの世界をどう見るか』)

やがてこのような動きは日本に伝わります。明治30年代の半ば頃から日本の幼稚園にも砂場が登場し、子どもの自由な遊びを象徴する遊具として広まってきました。

## 砂遊びの何が子どもの心をひきつけるのか

砂場では子どもたちが夢中になって遊んでいます。一体、砂遊びの何がそんなに面白いのでしょうか。

〇歳児期からの砂遊びの継続観察や種々の砂遊びのワークショップ開催を通して、いまその答えがようやく見えつつあります。

## 砂場の設置から訴えていきたいこと

一方、今日の砂場を取り巻く状況は決して平穏ではありません。犬猫が砂場を汚し、子どもの砂遊びが禁止され、公園の砂場も減少傾向にあります。また、砂で汚れるような遊びなど何の意味もないと考える人も少なくありません。子どもにとっての遊びの大切さや、本当の楽しさというものを大人自身が理解していないのです。

かつての子どもの遊び場であった原っぱや路地がなくなり、大好きな砂場までが失われ、子どもたちは一体どうすればいいのでしょうか。外での遊びなど、もう、いらないのでしょうか? 将来、教師、親として、子どもとかかわる学生たちにこそ、改めて遊びのもつ重要性を実感してもらいたい。そんな思いでつくられた大学の砂場には、今、地域の親子も訪れ、保育者・教員らの研修の場としても賑わっています。

現代のプレイグラウンド・ムーブメントを、女子大学の砂場から!



近隣の親子も砂遊び



学生たちがサンドアートに挑戦

# クリエイティブ経済におけるアートの役割

## — ライフリスク研究センターの開設と公開シンポジウムを通して —

大学ライフリスク研究センター  
大学経済学部教授 八木 匡

### これからの経済の方向

グローバルゼーションの進展は、世界の多くの人々の予想を遙かに上回るスピードで起き、その影響は私たち日本人にとっても想像を超えるものとなっている。その中で、最も重大な影響は雇用の喪失である。もちろん、空洞化論は1980年代から盛んに言われており、アジアを中心とした途上国への工場移転によって、ブルーカラー労働者の職場が消えていくことの危惧は長年指摘されてきている。しかしながら、これからの先進諸国の人々が危惧しなければならないのは、知識労働者の職の喪失である。マニュアル化された知識労働は、コンピューターやBPO等新興国の労働者に取って代わられようとしている。そして、これから経済において高い所得をもたらす仕事は、タニエル・ピンクの言う創造的「ハイコンセプト業務」になっていくと予想されている。

### ライフリスク研究センターの研究活動

このような激変する経済社会の中で、橋本俊詔大学経済学部

教授をセンター長とする、「リスク社会から安心ある心豊かな社会へ」を研究テーマに掲げた同志社大学ライフリスク研究センターが、2009年度にスタートした。センターの研究活動には、貧困、格差、環境リスク、ジェンダーといった研究課題を扱うだけでなく、安心ある心豊かな社会構築に向けての指針を提示することも重要な意義をもって含まれている。この後者の研究がなければ、真の意味で社会・経済のリスクを低めることは不可能であると言って良いであろう。

### アートとは何か アートの力とは

2010年5月15日に大学寒梅館ハーデイホールにおいて開催したシンポジウム「アートの力」は、21世紀の社会において日本が国際競争力を向上させ、人々に豊かな生活をもたらすための指針を得るために開催したものである。ここで、多くの人々は「何故アートなのか」という点に、戸惑いを感じられるであろう。そもそも「アートとは何か」という問いに対する答え自体が必ずしも自明ではない。クリエイティブ経済というコンテキストの中で「アート」の意味は、「既存のコンセプトを超

える新しい価値を創造する」ことであると理解している。この新しい価値が、21世紀社会において、雇用と所得を生み出し、安心ある心豊かな社会をもたらすのである。

前出のタニエル・ピンクによると、欧米を中心とした先進諸国では、すでにアートの重要性は盛んに議論されており、世界で競争力を持つトップ企業は芸術家の活用に関心を持っており、世界で言われている。たとえば、イギリスのロンドン・ビジネススクールでは「芸術家招聘プログラム」を実施していると言われている。ユニリーバ英国本社では、画家、詩人、漫画家などを雇用している。そして、近年科学者の間では、「アーツ&サイエンス」の概念の重要性が盛んに議論されるようになり、欧米の理工系大学が芸術学部を併設するケースが増えていることが話題にのぼっている。マーケティングの世界では、消費者を惹きつける要素として、「アート、物語性、歴史性」が重要であることが議論され、その中でも、豊かな物語性と歴史性を内包したアートは、消費者に訴求する強力な道具になるという議論が進んでいる。

### アーティストのアートとビジネス

このような議論の進展の中で、経済活動を行っている人々が考えるアートの重要性と、アーティストにとつてのアートの意味が本当に合致しているのかという問いが生まれてくる。また、アーティストが、ビジネスへの影響を考慮せず、本来の意味でのアートの創造を行っている場合にのみ、それは新しい価値を生み出し得るという理解もある。「アーティストばかりいたつ

て仕方がない」という発想から「アーティストを活かして、社会・経済の発展に繋げる」という発想への転換は、それほど容易ではない。だからこそ、その意味を真に理解し、その活用に関心した者、企業、組織、国が相対的に強い競争力を持ち得ることができると考えている。これらの問題を議論するために開催したシンポジウムが「アートの力」である。

### 公開シンポジウム

シンポジウムでは、姜尚中東京大学情報学環教授の基調講演に続いて、劇作家であり大阪大学教授の平田オリザ氏、ミュージシャンの佐野元春氏、岡部あおみ武蔵野美術大学教授が加わりパネルディスカッションを行った。本シンポジウムは、大きな反響を呼び、当日もハーデイホールは聴衆で埋め尽くされた。基調講演では、絵画を例にとりながら、アートの本質的な力とは何かについて話があった。そこでの重要なメッセージは、「生と死に直面し、絶望からアートが生まれる」というものであった。このことの意味づけは、現代社会が抱えている解答の無い諸問題をアートが引き受けることにより、個人の内面の葛藤に対する答えを導く力、それが、アートの力であると述べた。(56頁「レクチャー」に掲載)

パネルディスカッションの冒頭に、コーディネーターの河島伸子大学経済学部教授から、シンポジウム開催の意義の一つである、21世紀のクリエイティブ経済におけるアートの役割について説明があり、平田氏からは、情報社会の中で生まれてくる



ストレスを、芸術家がつつた世界観を知ることにより、解決する糸口を見いだすことができることが、アートの方の一つであるという意見が述べられた。そして、ロボット演劇の試みの意義について説明があった。

佐野氏からは、ソングライターが現代を生き抜く詩人であり、ポップソングは時代を超えたポエトリーであると、優れた歌詞とは、1. 優しい眼差しがあるのか、2. 生存の意識が真剣に現れているのか、3. 韻律（ビート）が同時性を持つのか、4. 自己憐憫でなく他者に視点が存在する詩であるのか、5. 普遍性があるのか、6. 音と言葉と継ぎ目の無い連続性があるのか、7. 共感を集めることに自覚的であるのか、8. 良いユーモアの感覚があるのか、といった基準を満たすものであると説明があった。

岡部氏からは、美術展覧会の場において、アートの多様性を通じて、社会状況の認識とジェンダー等の理解が可能となることがアートの重要な力であるという主張がありコレクションの動向を見ると、アートの社会に対するメッセージと社会がアートに求める役割の変遷を窺うことができると述べられた。

デイスカッションでは、「絶望からアートが生まれること」という基調講演での主張に対して、自己を追い込み、内面をさらけ出す時に、アート技法を用いることにより新しい世界観が生まれるという解釈が加えられた。さらに、混乱した現実がアートを超えていく時代のアートとは何かという問題提起に対して、アートがコミュニケーション手段となるにより、混乱した現実に対して解を与えることができ、そこにユーモアが入ることにより、問題解決の可能性が広がることが述べられた。

3時間におよぶ白熱した議論によって、21世紀の社会における「アートの力」に関する理解が深められ、盛況の内にシンポジウムは終了した。シンポジウムの開催によって、同志社大学から社会に向けて、21世紀社会に向けての新しいコンセプトと指針を少しでも示すことができたのであれば幸いである。